

人文学部の  
今を伝える

# Agora

人文ニュース<アゴラ>

"AGORA"とは、ギリシャ語で"広場"という意味です。

46巻2号  
山形大学人文学部  
2014.12.20

写真で教員の研究を  
楽しく紹介するコーナー

## ふ~あんたす~いっく!

突然ですが、みなさんは「刑法」と聞いてどのようなイメージを持たれますか。「悪人を罰するもの」、「なにか近づきがたいもの」、「自分には関係ないもの」(関係ない方がいいのですが)等々みなさん様々だと思います。一般に、「刑法とは犯罪と刑罰に関する法」と定義されます。刑法の条文の多くは、「○○した者は、××に処する。」という規定形式を探っており、刑法的に悪いと評価される行為をした一定の者(犯罪者)に、相応の刑罰を科すことを予定しています。私は、この刑法を対象とする学問分野である刑法学を専門としており、現在、「刑罰制度はどうあるべきか」について研究しています。

法務省の法務総合研究所という機関が編集する『犯罪白書』(写真①)によると、近年、犯罪で検挙された者の数は減少し続けているものの、そのうち再び検挙された者の占める割合(再犯者率といいます)は増加し続けています。そこで、再犯予防のためにどのような対策を講ずるべきかが喫緊の課題とされています。

先日、私のゼミナールに所属する学生を引率して、米沢市にある少年院「置賜学院」(写真②)を訪問しました。この施設では、犯罪を犯した少年が更生し二度と犯罪に陥ることなく社会生活を送ることができるよう多様な教育(矯正教育といいます)がおこなわれています(写真③は学院長の施設説明を真剣に聞くゼミ生の様子)。少年院に入る少年に対しては一般に良いイメージは持たれないと思われますが、彼／彼女らのなかには、恵まれない家庭環境で育ち、親からの愛情を十分に受けることなく行き場を失った結果として犯罪を犯してしまった者も少なくありません。したがって、少年が更生できるか否かは出院後の生活環境によって大きく左右されるとも考えられます。また、最近では高齢者による犯罪の増加が問題となっていますが、高齢犯罪者の多くも社会での居場所がないという状況に置かれています。このような現実を踏まえれば、厳罰化によって再犯予防を目指すこと以上に、犯罪者が再び社会に戻ってきたときに犯罪とは無縁の生活を送れるような環境作りを社会全体で実践していくことが必要ではないでしょうか。

さて、私の所属する人文学部法経政策学科法律コースには法律学を専門とする個性豊かな先生が多数おり、充実した教育・研究をおこなっています。そして、法律コースに所属する学生は法律学の幅広い知識を習得したうえで、裁判所事務官、検察事務官、警察官、あるいは将来法曹になるために法科大学院に進学を希望する人も多く、法律コースの卒業生がこれらの職に就いています。また、法律コースの学生は公務員試験の合格率が高く、私のゼミナール出身の卒業生も上記の職業のほか、県庁職員や市役所職員として活躍しています。興味を持った方は、最近リニューアルした人文学部のホームページをご覧になってください。お待ちしております!

法経政策学科 准教授 西岡正樹(刑法学)



▶写真①



▲写真②



▲写真③

山形大学人文学部  
facebookページ  
ぜひご覧ください。



# いのち短し、 好きな学問せよ、若人

わこうじょ

相沢直樹

人間文化学科長・教授(ロシア文学・比較文学)



学科長  
インタビュー

—早速ですが、自己紹介をお願いします。

はい。人間文化学科で今年度の学科長を務めている相沢直樹です。東京出身。子年のO型さそり座。専門はロシア文学と比較文学といったところです。

—山形や本学とゆかりが深いそうですね？

そうですね。もともと両親が河北町の出身で、父は本学の文理学部(人文学部の前身)で法律を学びました。ただ、子どもの頃は祖父母の言葉がよく分からなかったことがあります。私にとっては村山方言が最初の「外国語」体験だったのです。

—人間文化学科の特長はどういうところにありますか？

古今東西さらには虚実の時空を縦横に渡り歩いて、自由闊達に様々な研究・教育がなされているのが、この学科の最大の特長だと考えています。しかも、教員一人ひとりのレベルもかなり高い。様々な分野のすぐれた教員たちと交わりながら自分が専門的に学ぼうとすることを後から(入学してから)じっくり見極めて選ぶことができる、この学科のウリだと言ってよいでしょう。

—最近は文系に逆風が吹いているように言われますが。

たしかに、全体的にそういう雰囲気はあるかも知れません。しかし、こうした風潮はまったく一時的な現象だと私は思っています。近年の受験生に見られる理系志望の増加傾向には、卒業後の就職に有利そうだという、特に親御さんたちの思惑によるところが少なくないという指摘があります。理系が本当に就職に有利なのか、もう少し見てみないと怪しいと思いますし、何より「人はパンのみにて生くるにあらず」です。人間にとって精神的な価値がどれほど大事かは、たとえば、今でも「資格」と直接関係なさそうな学問分野に人気があつたり、大学院の文化システムに社会人からの応募が後を絶たないことからも分かるのではないかでしょうか。

—ご自身は科学少年だったというのは本当ですか？

そうですね。子ども時代はロボットやリニアモーターカーに憧れる、ごくフツーの科学少年で(上野の科学博物館のフーコー振り子に触って、何度も軌道をズラしてしまったのは私です)、レオナルド・ダ・ヴィンチが子ども時代のヒーローでした。高校時代の前半は物理法則で「世界」がすべて説明できそうな気がしてワクワクしていました。でも、ちょっと口幅ついたい言い方になりますが、そのうち理系の、というか理系的思考の限界を感じちゃったんです。ただ、も

ともとルネサンス文化人が理想ですから、文系か理系かという二分法や「専門」にも必要以上にこだわりたくありません。狭隘な悪しきスペシャリスト(専門家)よりも想像力豊かなジェネラリスト(全体を見渡せる人)を標榜しています。特定の専門しか知らない頭でっかちの人ばかりが集まると、道を誤りやすい。最近の国を挙げての妙に理系偏重の風潮に対しては、オウム事件の教訓を忘れたか、STAP細胞問題でまだ懲りないのか、と言いたいです。

—ロシア語を教えていらっしゃる立場から、大学における外国語教育を取り巻く状況をどうご覧になっていますか？

この頃はどこに行っても「グローバル」という言葉が聞かれます。ちなみに、誰も覚えていらっしゃらないようなので自分から話しますが、「グローバル・スタディーズ」の類の言葉を本学で最初に使ったのは多分私です。10年近く前に現在の法経政策学科にいた時「グローバル・スタディーズ」という領域を作ろうとしたら、英語としておかしいという指摘を受け、「グローバル・システム・スタディーズ」に改めた経緯があります。大学におけるグローバル化の推進によって外国語教育の意義が深まりつつあるように見える一方で、妙なことも起きています。そのひとつが、特に時折理系の方から聞こえてくる、外国語教育は英語だけよいかのような乱暴な議論です。これはグローバル化対応を口にしながらグローバル化への逆行を選択する道である、と警鐘を鳴らさずにはいられません(グローバル化とは単一文化・単一社会への収斂ではなくして、多文化社会における共存共栄をこそ目ざすもののはずです)。グローバル化=英語化という歪んだ考え方の背後にあるのは、目の効率にばかりとられた、狭隘で短絡的な世界観であり教育観ではないでしょうか？

—ところで、『ゴンドラの唄』をめぐって本を出されていますが、「いのち短し恋せよ少女」ってロシア文学と何か関係あるんですか？

あまり知られていないのですが、ツルゲーネフの『その前夜』という小説を大正時代のわが国の芸術座という劇団が世界に先駆けて舞台化した際に挿入された劇中歌が『ゴンドラの唄』なんです。私はもともと『その前夜』の研究をしていましたが、この作品の日本における受容を調べていてそのことに気づきました。おまけにこの歌が生まれるきっかけは、ちょっとした誤訳にあるようなんです。来年は『ゴンドラの唄』が生まれてちょうど100年に当たるので、いろいろなイベントなどが計画されているんですよ。

# 経済学に全く興味がなかつたのに、 気が付いてみると…

是川晴彦  
法経政策学科長・教授(ミクロ経済学・公共経済学)



—ミクロ経済学のご担当ですが、なぜ経済学を研究するようになったのでしょうか？

大学時代にミクロ経済学ゼミの募集案内を見たとき、一般均衡とか厚生経済学といった言葉に何となく魅力を感じました。ミクロ経済学なら公務員試験にも役立ちそうだと考え、入ゼミを決めたのが経済学との出会いです。このゼミの志望者には初回のゼミまでにミクロ経済学のテキストの練習問題を全部解いておくという課題が出ていました。私はミクロ経済学を履修していなかったので、春休みに必死でテキストを読み、問題を解きました。その過程で、モデルを用いて家計や企業の行動を分析することに興味を持つようになり、さらに、ゼミを通して、様々な経済現象を理論的に解明していく経済学の面白さに目覚めました。気が付けば現在に至っています。



—先生のご専門をもう少し詳しく話してください。

課税政策が経済に及ぼす効果について一般均衡モデルを用いながら分析する研究を進めてきました。現在では、分析対象を不完全競争市場に拡げ、効率性損失の尺度についても研究しています。また、近年、公共経済学の視点から、自治体の行政評価や中心市街地活性化についても分析を行っています。

—講義ではどのように留意しているのでしょうか？

一つのテーマを解説する際には、直観的な意味づけ、図を用いた解釈、そして数式による一般化というプロセスを大切にしています。図を用いた解説がわかりやすい人もいれば、数式ならよくわかるという人もいるというように、人によって理解しやすい方法は異なります。そのため、まずは、自分に合った方法で理解し、そのうえで

他の方法による解釈にも挑戦するという勉強が実現できる講義を心がけています。また、学生の皆さんには理解できたという喜びを味わってもらいたいので、講義では事例や数値例を多く取り入れて、理解がしやすくなるように努めています。

—学生の皆さんへ伝えたいことはありますか？

学問との出会い、そして人の出会いを大切にしてほしいと思います。私は経済学部を選んでいながら高校生まで経済に興味がなく、また、在籍していた大学自体も希望していた大学ではなかったので、ゼミに入るまでは本当に無気力な学生でした。さすがに、このまま学生生活を続けたのでは何も残らない、何かしなくては、と焦り始めた時に、先に述べたゼミの募集案内を見たのです。本格的に勉強してみると経済学の面白さを感じ、また、勉強に力が入ると学生生活も前向きになり、その結果、教員や友人との交流が深まっていくことになりました。皆さんの中には現状に満足していない方もいるかもしれません、投げやりな態度のままでいると、学問との出会いや人の出会いを自ら放棄してしまうことになり、皆さんがいろいろな面で成長できる可能性が失われます。これは大変もったいないことです。与えられた環境でまずは頑張ってみると何らかのチャンスが生まれてきますので、そのチャンスを逃さず生きることが大切だと感じています。

—なるほど。法経政策学科ではどのような出会いがあるでしょうか？

法経政策学科には、法学・政治学・経済学・経営学といった社会科学の諸分野における重要な科目がそろっています。カリキュラムにおいても1・2年次では基礎的な科目を、3年次以降では発展・応用的な科目を学べるように工夫してあります。皆さんには、1・2年次のうちに社会科学の基礎科目をいろいろと学んでもらい、これならもっと深く学んでみようと思える学問領域に出会ってほしいです。また、3・4年次の演習では、専門知識を深めるとともに、論理的に思考し説明する力を身に付けてもらいます。この力は皆さんのが卒業後に社会で活躍する際に、とても役に立つのですから、演習で学ぶ機会も積極的に生かしてほしいですね。

法経政策学科では、平成27年度からは医療経済学や公会計など、現代の社会問題を考えるうえで重要な科目が新規に開講される予定です。一層のカリキュラムの充実がはかられますので、楽しみにして下さい。

# 新任教員紹介

新任教員から皆さんへごあいさつを申しあげます。

## 人間文化学科

人間文化学科 講師 合田 陽祐  
(フランス文学・芸術)



2014年10月に人文学部人間文化学科に着任いたしました合田陽祐と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。山形はご飯がおいしくて、親切な方が多く、本当に良いところですね。さっそくファンになってしまいました。

私の専門はフランス文学・芸術で、とくに十九世紀文学史をメディア論の観点から検討しています。たとえばバルザック、ゾラやボードレールは、小説家や詩人として有名ですが、実は彼らは、新聞や雑誌に定期的に寄稿する一流のジャーナリストでもありました。作家たちが当時のメディアと切り結んだ関係を、歴史的視点からのみならず、社会学や言説分析といった理論を活用して再定義することを試みています。

十九世紀の新聞や雑誌の多くは、現在ではフランス国立図書館のサイトを通して無料で閲覧できます。そうした定期刊行物を見ていると、単行本を読むだけでは知りえなかった情報や、文章を飾るかわいいイラストに出会うことがあります。こうした通常の文学史の教科書には記されていない、いわば文学史の「裏街道」をじっくり探索してゆくことに、大きな歓びを覚えております。講義等をつうじて、学生のみなさんとこの歓びを少しでも共有することができればと考えています。

またフランスを深く知るには、やはりフランス語を学ぶのが理想的です。語学の授業では会話練習に重点をおき、実践的なフランス語を身に付けるためのお手伝いができると思っております。

人間文化学科 講師 高橋 真彦  
(言語学・統語論)



2014年10月に人文学部人間文化学科に着任いたしました高橋真彦です。どうぞよろしくお願ひいたします。

私の出身は秋田県です。高校を卒業した後これまで、東京都、宮城県、アメリカ、三重県の順に引っ越しを繰り返しました。その中でも一番長かったのがアメリカでの6年半です。この度漸く東北の地に戻ることができ、大変嬉しく思っております。

私の専門は言語学の統語論で、母語話者の持つ言語知識の解明に取り組んでいます。私たちは母語話者として普段無意識に言葉を話します。しかしよく調べて見ると、私たちの母語の文法には生後誰から教わったとは考えられないような複雑な規則が存在していることが分かります。そのような規則が遺伝的にヒトに備わっているという仮定の下で、日本語や英語等の現象を分析し、母語話者の文法の性質を少しでも明らかにできるように研究しています。現在は文法格（日本語では格助詞（「～を」「～に」「～が」等）として現れ、英語では代名詞の形（he, him, his 等）に現れます）に興味があり、母語話者の文法における文法格の働きを研究しています。

言語学を学ぶこと自体も大変面白いと思いますが、言語学を通して学ぶことも非常に多いと思います。文献を読み、情報を整理して、その後に自分なりの考え方を提示し、論文の形に纏める。学生の皆さんにはこのような過程を通して「自分で考え、発信する」力を学んで欲しいと考えています。

人間文化学科 講師 摂津 隆信  
(ドイツ語・ドイツ文化論)



2014年4月に人文学部人間文化学科に着任した摂津隆信です。高校卒業まで熊本県で生活し、大学入学からずっと東京にいましたので、山形は初めてです。ご飯と酒が美味しいくて、体調（体型）管理に難儀しています。

科目は主にドイツ語とドイツ文化論を担当しています。私の専門は20世紀のドイツ演劇・喜劇です。「演劇とか喜劇の研究って、意味あるの？」とお思いになるかもしれませんね。演劇の良いところは、集団で何かを作り上げ、それを他者に見てもらうことがあります。芝居をするには、まず役者たちを集め、台本を決定し、音楽や照明などをどうするか議論し、どの劇場を使わせてもらうか、チケットをいくらにするか、チケットをどう売るか、など様々な行動が要求されるのです。そしてその結果を観客に見てもらって、良し悪しを判断してもらう。これって、いわゆる「社会人」の生活そのものではないでしょうか。

ただ、「学ぶ意味」や「役に立つか立たないか」といった判断基準は他者から与えられるものではなく、自分で考えて創りだすものです。「意味がない」と思ったら、「意味あるものにするためにはどうすればいいか」を自分で考えればいいのです。社会はそれを「主体性」と呼んでいる、と私自身は勝手にそう思い込んでいます。

皆さんと私の出会いが、互いにとって「意味ある」ものになればこれにまさる喜びはありません。未熟ではございますが、何卒よろしくお願いいたします。

人間文化学科 講師 吉井 文美  
(日本近代史)



2014年10月に着任しました、吉井文美です。群馬県で生まれ、東京にて大学・大学院生活を送りました。院生時代に一年間台湾に留学しまして、暑さへの適応性は鍛えられたように思いますが、寒さはまだ苦手です。

私の専門は日本近代史です。とくに、1930年代に日本が中国における支配地域を拡大する過程で、イギリス・アメリカを巻き込みながら発生した国際問題を研究しています。たとえば、中国のある地域でイギリス企業が活動していて、その企業は中国政府に税金を納めてきたのに、自分のいる地域が日本の実質的な支配下に入ってしまったとき、今後中国と日本のどちらに納税や登記をすべきか、迷うところです。これは一企業の身に起きた問題でありながら、現地日本軍による圧力や、イギリスの外交方針などとも連関し、国際問題化するケースが多々ありました。日本は既存の条約関係や国際秩序のなかで、問題をいかに処理しようとしていたのか、中国各地で起きた事例を検討することで、当時の日本をとりまく国際環境の変化を見ようとしています。

戦時期の日本史のイメージは何でしょうか。暗い…？それはなかなか否定できないのですが、学生の皆さんには、当時いろいろな人がどうすべきか迷い、悩みながらも合理的だと信じる判断を繰り返していたことを知ってほしいと思います。当時の人々の思考回路を史料から正確に読み取る力を養うことは、現代の社会を見つめる目も鋭くしてくれるのではないかと思います。

## 法経政策学科

法経政策学科 講師 池田 弘乃  
(法哲学)



2014年4月に人文学部法経政策学科に着任いたしました。専攻は法哲学です。東京から文字通り新天地となるこの山形にきて以来、刻々違う相貌をみせる山並みに感動し、美味しい食べ物に心身ともに充たされ、温かい人々（就中同僚の教職員の方々）の配慮に助けられながら毎日暮らしています。この分なら初めてとなる冬の寒さも乗り切れるのではないかと希望的な観測をしております。

私の研究テーマは、ジェンダー・セクシュアリティと法の関わりを探求することです。特に、フェミニズム法学に関心をもち、「両性の平等」という志向と「性的な差異の根源的な再考」という志向との緊張関係の中で展開される思考のあり方の意義と問題点を考えました。その上で、「性別にかかわりなく」「個人の尊重」される社会とはそもそもどのような意味なのか、そのような社会はいかにして可能なのかについて、親密圈や性的マイノリティに関わる法的問題を取り上げながら研究しています。

講義では「法哲学」、「私法入門」を担当しています。法学が単なる「パンのための学問(Brotwissenschaft)」ではない面白さと魅力をもっていることを何とか伝えることができないか模索しているところです。そのためには政治学、経済学といった隣接する学問分野への目配りがかかるかもしれません。それらとの対照の中で、学生の皆さんのが法学という知のあり方の威力と限界を学んでいく手助けができると念願しています。

法経政策学科 准教授 杉野 誠  
(環境経済学)



2014年4月に人文学部法経政策学科に着任しました。生まれは静岡ですが、育ちはアメリカ（主にノースカロライナ州）です。高校は神戸のインターナショナル・スクール、大学は東京、大学院（修士課程）は岡山、大学院（博士課程）は東京です。その後、4度の転職を経て、山形に来ました。環境の変化には慣れているつもりですが、雪国は生まれて初めての経験のため、不安で一杯です。

私の専門分野は、環境経済学です。具体的な研究テーマは、産業部門に着目した地球温暖化対策です。温暖化対策以外にも、廃棄物問題や大気汚染など様々なテーマに興味があります。今後は、守備範囲を広げ、授業・ゼミに反映させていきたいと考えています。

人文学部では、「環境経済学」の授業を担当しています。開講されている、「環境と経済」と差別化を図りつつ、学生にとって実り多い授業を提供していきたいと思います。環境経済学演習（ゼミ）を初めて受け持っています。前期は、ゼミ生1人履修していましたが、どの様に進めるか解らず試行錯誤しました。後期から、ゼミ生が13人に増え、独自のスタイルを確立するために日々試行錯誤を続けています。また、来年度は、新設科目を1つ担当する予定です。

最後に、受講生・ゼミ生に「先生の授業を受けて良かった」と言ってもらえるよう、日々精進していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

法経政策学科 准教授 坂本 直樹  
(財政学・地方財政論)



2014年10月に、「財政学」と「地方財政論」の担当教員として、人文学部法経政策学科に着任いたしました坂本直樹と申します。大学教員としてはこちらが3校目となります。京都府の私学に4年、宮城県の私学に7年半勤務して、このたび、山形大学に参りました。出身は、岩手県の北上盆地にある紫波（しわ）という町です。引っ越して日が浅いですが、どのアングルからも山並みが目にに入る山形市は、どこなく故郷を思わせ、愛着が感じられます。着任してすぐの10月は晴れの日が多く、青空に映える山々の緑に感激しました。これからどんどん山形の魅力を知ろうと思います。

講義では、時折、うなずいたり、首をひねったりしながら、学生の皆さんのが真剣な眼差しで説明を聞いてくれるので、やりがいがあります。講義の内容だけでなく、関連する時事問題についても、質問を寄せてくれる学生もいて、いい緊張感を感じながら、日々楽しく講義に臨んでいるところです。

「専門は何ですか」と聞かれると、「財政学です」と答えることにしていましたが、「公共部門を対象とした応用経済学です」というのが一番しっくりくるように思います。もちろん、財政や地方財政の論文は書いていますが、最近では、社会資本整備や地球環境問題、地域観光など、「役に立つ経済学」を意識して研究に取り組んでいるところです。

すばらしい環境に恵まれた山形大学で、心機一転、スタートをきることができました。まだ分からないことが多い、お世話になることもあります。ありがとうございますが、なにとぞ、よろしくお願い申し上げます。

法経政策学科 准教授 潤川 健一  
(マクロ経済学)



2014年4月に着任しました。高校まで茨城県で過ごし、大学進学以降、山形に参るまでは東京にいました。山形については、大学時代に一度、銀山温泉に立ち寄った程度で、ほとんど何も知らない状態です。今後、色々と山形を散策し、様々な人に魅力を伝えたいと考えています。

私の専門はマクロ経済学です。マクロ経済学は、「国」といった大きな単位を対象として、生産量、物価、失業などの動向を分析する学問です。簡単に言えば、マクロ経済学は、好景気・不景気が何故起こるか、どうすれば不景気を解消できるかなどを考える学問です。

近年、マクロ経済学では、現在の経済的環境が「人々が将来の経済的環境をどう予想するか」に依存して決まる、ということを重視しています。人々が将来をどのように予想し、それを現在の行動にどのように反映させているか。これを明らかにし、我々の暮らしを豊かにする策を考えることが、最新のマクロ経済学にとっての目標の一つとなっています。

学問の話はさておいて、世の中では、「現状は不景気」という認識が長引いているようです。「マクロ経済学の学者に存在価値なんてあるのか？」という疑問が当然のように出てくると思われます。この疑問については、私はこう答えます、「我々がいなければ景気はもっと悪くなっていたでしょう。」理屈か屁理屈か。私とともにマクロ経済学を学んで考えてみませんか。

# 異文化間コミュニケーションI 帰国報告

## 青い海とホームステイ、本場での英語実習!

8月25日  
成田空港発  
9月15日  
成田空港着

8月25日～9月15日までオーストラリア、ケアンズで異文化間コミュニケーションIを実施しました。この科目のねらいは、同時代の異文化の実相を実践的に理解し、これまでに身につけてきた専門的知識や語学的能力を駆使し、異なる文化に直接向き合い、異文化理解に必要な方法を体験的に修得すること、到達目標は海外にて、新しい環境に身を置き、異文化の一端を体験・理解することです。

今回は17名の学生が受講し、ジェームズ・クック大学での3週間の英語研修のほか、ケアンズトロピカル動物園・大学附属水族館・世界自然遺産であるグレート・バリア・リーフや熱帯雨林を訪れるツアーに参加するなど様々な体験をしました。また、先生やホストファミリーとの交流などを通じて生きた英語コミュニケーションを体験し、その難しさを実感しながらも楽しさを満喫して、全員笑顔で帰国しました。なお、今回の実習は、ふすま同窓会からの費用補助も受けて実施されました。



### 異文化間コミュニケーションI（ケアンズ）参加者

齋藤華子	田中文奈	平塚真紋	大沼寧々
大泉友奈	門間映香	阿部美鈴	瀬川大昭
品川 悠	安藤結莉菜	川口御生	茂木 康
高橋美保	蜂屋里実	金田耕哉	山川茉奈
八木美奈海 (地域教育文化学部)			



Thank you! Catch ya later!

8/24  
仙台空港発  
9/7  
仙台空港着



### 異文化間コミュニケーションI（台湾）参加者

大槻健太郎	坂下万由
小池亜実	中村樹里
中野朱理	白川由季
安藤茉衣	高橋彩音
廣谷麻美	宮本はるな
芦生のぞみ	寺崎 華



### 台湾中部の農村を歩き、聞き、体感する

台湾中部の雲林地区は台湾有数の農業生産を誇ります。ここで台湾師範大学の教員・院生とともに、地域の歴史遺産や伝統文化を見学し、日本統治時代を知る高齢者へのインタビュー、鎮長（市長）以下現地の方々との交流をしました。



### 台北市内でフィールドワーク

#### 独自の台湾研修プランを作る

学生には「7日間の台湾研修プランを作る」というミッションが与えられました。学生は班に分かれ、師範大生とともに街頭調査をし、旅行ツアーとは異なる、深く台湾を学ぶためのプランを自分たちで作ります。不十分な語学力を、勇気と知恵とチームワークでカバーしながら、市民の“本音”を聞き出します。なおこの成果は、10月3日（金）に帰国報告会として、活発な質疑応答を経て無事に終了しました。



# 地域づくり特別演習

人文学部では、地域との密接な関係の中でフィールドワークや実地体験を行う授業が開設されています。その代表的な授業である「地域づくり特別演習」について、山本匡毅先生にお話を伺いました。

## ■ 地域づくり特別演習(一)

法経政策学科 教授 下平裕之 | 法経政策学科 准教授 山本匡毅

### —この演習はどのようなものですか？

「地域づくり特別演習(一)」は2005年度より開設された、山形県金山町における現地実習を中心とした夏季集中講義です。当演習では金山町のご協力を頂き、学生によるフィールドワークを通じて地域活性化プランの作成を学ぶとともに、地域へ提案を行うことで、地域に貢献するという特徴を持っています。今年度は、9月8日～11日の日程で、18人の学生が金山町の南東部に位置する片貝地区をフィールドとして活動しました。

### —どのような活動を行ったのですか？

演習は4日間の日程で進められます。1日目は、地域づくりの基礎知識をテキストの解説を通じて習得し、地域づくりに必要な地域資源の価値発見・活用手法とワークショップ等の方法を学びました。2日目と3日目は金山町で1泊2日の現地実習です。9月9日は、バスを使って金山町全体を見学したあと、フィールドの片貝地区を住民の方に案内していただき、地域資源の状況を把握しました。その上で3つのグループに分かれ、地区の地域資源を発



フィールドワークの様子



学生による発表会

## ■ 地域づくり特別演習(二)

人間文化学科 教授 山崎彰 | 法経政策学科 教授 松本邦彦 | 法経政策学科 准教授 山本匡毅

### —この演習はどのようなものですか？

「地域づくり特別演習(二)」は、主に山形市及びその周辺地域で活動するNPOや市民団体の活動に受講生が参加する実地体験型の授業です。学生は毎週、希望する組織の一員として参加しますので、インターンシップの性格も有しています。

### —どのような活動を行ったのですか？

今年度は7人の学生が受講しました。研修先はNGO、環境NPO、中間支援組織、日本語ボランティアなど多岐の分野に亘りました。研修内容は、イベント運営、事務、ホームページ更新、アンケート調査など様々です。学生は最低でも週に1回以上、組織の一員として活動し、毎週の演習では定期的な報告が求められます。また、研修組織での実習の他に、演習時間内にNPOや市民団体の第一線でご活躍されている方をゲストスピーカーとして招聘し、ご講演をお願いしています。学生は、講演と質疑応答の中でNPOや市民団体の実務や課題をface to faceで学びました。

### —この演習の魅力を一言お願いします。

新たな公共として市民活動が改めて注目されて5年ほどが経



NPOやボランティア団体との交流会

# 鎌倉実習の旅(日本史実習)

人間文化学科 教授 松尾剛次

今年も神奈川県鎌倉市をフィールドに日本史実習を行った。今年は7月4～6日の2泊3日で、建長寺を宿泊場所にして実施した。32名もの参加者があった。4月～6月にプレ実習として班に分けての研究会(予習会)を行い、現地で各自の報告と調査を行った。鎌倉は鎌倉幕府という武家政権の故地であり、日本史演習(二)で輪読する「吾妻鏡」の舞台である。そのためもあり、訪問する度ごとに発見があり興味がつきない都市である。

鎌倉は東京から電車で1時間15分くらいのところに位置し、平日であっても混雑している。15両編成の電車が多く、「短い10両編成で参ります」という駅のアナウンスが、1両編成の電車も走る山形人にとって皮肉に聞こえるほどの混雑ぶりだ。だが、実習で訪れる場所は、地下に遺構が残っている所など、普段では見向きもされないとところが多く、閑散としている場合が多い。学生諸君は、予習をして臨んでいるだけあって、その目は大いに真剣であった。毎日、午前6時には座禅会を1時間程度行ったが、鎌倉禪の世界をも体



鎌倉寿福寺にて

人間文化学科 准教授 松本雄一

見渡す限りの岩山、緑は川の周囲だけ。山の斜面を歩くと周囲には枯れたサボテンが転がっている。私が昨年度から調査を始めたインヘニオ谷はそんな場所だけです。この谷は有名な地上絵が集中するナスカ台地のすぐ北に位置しており、「ナスカの地上絵を制作し、使用した人々はどこでどのような暮らしを営んでいたのか?」という問題を考えるのにまさに最適の場所といえます。この谷を広く歩き回り、どんな遺跡がどこにあるのかという基礎的な情報を手に入れ、そのデータから人々の生活を明らかにすることが今回の調査の目的でした。

もちろん事前にできる限りの本や論文を読んではいたのですが、しかしこちら本を読んで頭で知ったつもりになっていても、実際に調査を始めてみるとあまりに衝撃的な風景に呆然とし、「サボテンでも水がないと枯れるんだな。」などと愚にもつかない感想しか思い浮かびませんでした。緑豊かな山形にいる这样一个風景を想像することはとても難しいのです。

古代の人々は川の周囲を農業に使うために確保していたので、歩きやすい平地には遺跡があまりないと考えられています。大部分の遺跡は山の裾野から中腹に位置しており、必然的に



インヘニオ谷の風景



山の斜面に走る道

岩山を歩き回ることになります。そしてなれない私は滑って転びます。枯れたサボテンのとげが靴底を突き抜けることもあります。若いペルー人考古学者二人が同行してくれていたのですが、見かねたのか先行して安全な道を確保してくれました。急な斜面に道幅が30cmなどという場所も多く、滑ったらろくでもないことになるだろうと容易に想像ができます。威厳もないにあったものではないですが安全には代えられません。確かな足取りで進む彼らの後ろをおつかなびっくりしていました。

考古学において新たな調査は、課題を解決するのではなく新たな課題を浮き彫りにすることが多いように思います。今回の調査もその一例で、到底登れないような山の上に作られた石壁、急な斜面に作られた住居などをいくつも訪れ、そのたびに「何のためにこんなところにこんなものを作ったのだろう?」「ここでどうやって生活したのだろう?」という疑問が浮かびました。今度は新たな課題にむけた調査を考えなくてはなりません。

そして今回の調査で山形大学の研究所がナスカにあることがいかに心強いかを痛感させられました。一日中山と谷を歩き回ってヘトヘトになっても帰る場所があるということはこのような調査では極めて重要なことです。研究はもちろんのですが、精神的な意味でも本当にありがたいなあと、研究所の台所でおいしいナスカ産アボカドを使ったサンドイッチを作りながらぼんやりと考えたのでした。

# 地域とともに

## 今年度の公開講座

### ◇前期公開講座(人間文化学科)

#### グローバル時代への挑戦 ～等身大の留学体験～

人間文化学科 教授  
新宮 学

平成26年度前期の公開講座は、上記のタイトルで6月9日から23日までの期間に5回の講座として開催されました。今回のテーマは、昨年度からスタートした本学の実践教育プログラム「グローバル・スタディーズ」と学科のコース改編にあわせて企画しました。

この講座では、グローバル時代に先駆けて果敢に長期留学を試み、かつ自己の学問を形成した中堅・若手の講師陣に、等身大の留学体験や興味深い異文化体験についてありのままに語っていただきました。「冷戦」構造崩壊の幕開けとなった解体期のソ連(ロシア)への留学に始まり、イギリス、アメリカ、ドイツ、モンゴルとさまざまな歴史と文化をもつ都市での留学の具体的な体験談、哲学・文学・歴史学・言語学・考古学というようにそれぞれ異なる学問研究上の訓練方法、日本とは大きく違った外国の教育観など、留学にもさまざまなカタチがあることを浮かび上がったように思います。

今回は、とくに講師陣に授業等での宣伝をお願いしたこともあり、毎年参加される社会人に加えて、在学生も多数聴講しました。それに高校生や短大生も加わって、最近の若者の留学への関心の高まりを感じさせるものでした。

これからますますグローバル化が進む21世紀をより豊かに生きるために、教育と研究の新たなカタチについて共に考えようという、企画側のねらいは十分に適えられたのではないかでしょうか。さあ、今度はあなた自身が留学を考えてみる番です。



質問に答える小泉准教授

### 【受講生の感想】

- \*友達に誘われて受講した。短い時間でいろんな国について深く知ることができることを楽しみに受講しました(高校生)。
- \*アメリカからモンゴルまで、いろいろな留学スタイルについて聞くことができて楽しかった(50代女性)。
- \*今回初めて受講させていただきました。受講前は、大学の授業ということもあり難しいのかと思っていたが、体験談に基づいた話が多くだったので、分かりやすく、これから的人生を考える上で一つの材料となりました(高校生)。
- \*今回の講座でさらに留学に興味がわきました。留学関係のイベントなどには積極的に参加していきたいです(短大生)。
- \*実体験をもとに留学するまでにしておくべきことや留学の手続きを聞くことができて良かったです(大学生)。
- \*留学に興味を持っていたが、実現できなかった。また孫に留学したいと言われた時に参考にしたい(70代男性)。

人文学部では、学生だけでなく地域の皆様にもご参加いただける公開講座・学術講演会を実施するとともに、地方自治体や海外大学・研究機関とさまざまな交流をしています。

### ◇後期公開講座(法経政策学科)

#### グローバル世界と日本はどうつきあうか

法経政策学科 教授  
高橋 良彰

本年度後期の公開講座は、「グローバル世界と日本はどうつきあうか」と題して、さまざまな分野を専門とする本学教員を講師に開催することができました。

公開講座を企画しておりました当時は、TPP交渉への参加が大きな話題となっておりました。これからの日本がどうなっていくのか、我々はどうしていくべきなのか、アベノミクスと呼ばれる政府の政策が一部でもやはりやられる中、不安もまた感じていたところでした。外交問題が国内問題と複雑に絡み合う現代社会を批判的に分析し、どう対処していくか、少々重い課題とはなりましたが、今だからこそ取り上げる意味があるのではないか、と考え企画した次第です。

ハイスピーチ規制、医療制度の行方、グローバル化とナショナリズムの関係、南極海捕鯨事件、民間外交・文化外交の役割、といった幅広い内容となっていましたが、これからの日本がじっくり腰を据えて未来を展望することができるような視座のようなものは感じることが出来たのではないかと思います。

熱心に受講していただいた受講者の皆様をはじめ、講師の先生方はもちろん、受付の学生さんや裏方として支えていただいた事務室のスタッフの方々にもお礼申し上げます。ありがとうございました。



第1回講師の中島准教授

### 【受講生の感想】

- \*表現の自由が保障されている民主主義社会の構成員として要求される「意識の高さ」のための学習の必要性とそれを身につける努力が求められていることを強く感じました。
- \*「敵」を想定しない勇気と柔軟さを持つように努力したいと思います。
- \*市場原理と医療の本来の使命に引き裂かれつつもバランスをとっていくなければならない現実を認識できました。
- \*日本の医療制度の良さがわかりました。
- \*改めて「視野をひろく持つこと」の重要性と、自分に都合のよい情報ではなく信憑性ある客観的情報を持つことの難しさを考えさせられました。
- \*グローバル化からナショナリズムの強化に至るまでの流れが非常によくわかりました。
- \*捕鯨問題に関するニュースを耳にしていたため、今回の講義を聞くことができてよかったです。簡単に解決できる問題ではないということが分かった。
- \*(国際司法裁判所の)判決を無視したままにせず、日本側から日本の調査捕鯨についての情報を世界に発信するなどの措置をとっていくべきではないかと思いました。
- \*政治間外交と民間外交で全く違う反応だったことにとても驚いた。民間では戦争をさける方針であることがとても嬉しかった。
- \*最後は人と人のつながりだと思います。

## 東日本大震災から3年…卒業生のみなさんに贈りたい「おめでとう」と「おかえりなさい」

# ホームカミングデー2014

10月18日(土)に「ホームカミングデー2014」を開催しました。

今回で3回目となるホームカミングデーは、新築した人文学部301講義室を会場に、第1部「ティーデマンふすま賞授賞式」、第2部「特別講演会」、第3部「3年目の卒業祝い」、第4部「懇親会」の構成で、卒業生・学生・教職員等約100名が参加しました。



H22年度卒業生からのメッセージ



会場前ふすま同窓会のパネル展示

### 第1部 ティーデマンふすま賞授賞式

第1部の「ティーデマンふすま賞授賞式」では、ふすま同窓会の長沼龍平会長から人文学部卒の田中理沙さんと2名の理工学研究科の学生に授与されました。なお、この賞は人文学部と理学部の学生の優秀公募論文に対して表彰されるものです。



司会の澤田教授



北川学部長の開会の辞



ふすま同窓会の長沼会長からティーデマンふすま賞を授与される田中理沙さん

### 第2部 特別講演会「三陸鉄道 震災からの復旧・復興」

第2部の特別講演会では、三陸鉄道株式会社代表取締役社長として三陸鉄道の全面復旧にリーダーシップを発揮された望月正彦氏(人文学部卒)から「三陸鉄道 震災からの復旧・復興」と題する感動的な講演をいただきました。



12月公演のアナウンスを行う第42回模擬裁判実行委員会委員長の鈴木利規さん(法経政策学科3年)

なつかしい画像を紹介する望月氏

### 第3部 「3年目の卒業祝い」

第3部「3年目の卒業祝い」では、東日本大震災の影響で学位記授与式を行えなかった平成22年度卒業生60名弱へ指導教員メッセージ入りの「祝いの色紙」が北川学部長から一人ひとりに授与されたあと、「学生気分をもう一度」のテーマでトークセッションを行いました。



小山清人学長の祝辞



北川学部長が卒業生一人ひとりに「祝いの色紙」を授与



卒業生代表挨拶する大竹智子さん



トークセッション司会の元木副学部長(左)と川合景子さん(人間文化学科卒)と渡邊前学部長



トークセッション遠藤いずみさん(人間文化学科4年)と坂井教授



トークセッションの様子



笑みがあふれる!



富田教授の閉会の辞



参加者全員で集合!

### 第4部 懇親会

第4部の「懇親会」はキャンパス内厚生会館で行い、恩師や旧友との再会に大いに盛り上がりいました。



懇親会で開会あいさつする是川学科長(法経政策学科)



坂井教授の発声で乾杯!

# 人文ニュース

今期、人文学部で行われた様々なイベントや主要なニュースをお届けします。

## 中島准教授と大久保准教授が基盤教育ベストティーチャー賞を受賞！

7月1日(火)、学長室において平成26年度「基盤教育ベストティーチャー賞」ならびに「基盤教育ベストティーチャー新人賞」の表彰式が行われました。

基盤教育ベストティーチャー賞ならびに同新人賞は、基盤教育において優れた授業を提供している教員を選定し表彰するもので、教員推薦または学生推薦により受賞者が決定されます。教員推薦の場合、複数の教員の推薦に基づき、学生による授業改善アンケートの結果、受講者数、教育方法の工夫・改善状況などが審査されます。

今年度は全学で6名の教員が受賞し、人文学部からは教員推薦により、中島宏准教授(法経政策学科)がベストティーチャー賞を、大久保清朗准教授(人間文化学科)がベストティーチャー新人賞を受賞しました。



学長を囲んでの受賞者記念撮影（右から3人が中島准教授、左から2人が大久保准教授）



大久保准教授の模擬講義



先生とのつどいの様子

## 人文学部オープンキャンパスに来場者1,800名！

8月2日(土)にオープンキャンパスを開催しました。人文学部では、「学科説明会」や「模擬講義」「先生とのつどい」「在学生とのつどい」「教室見学ツアー」など、本学部の魅力を伝えるための様々なプログラムを開催し、多くの高校生や保護者の方にお越しいただきました。

1回目の学科説明会では、用意した870席が満席となり、立ち見の出る状況となりました。また、例年大人気の松尾剛次教授の模擬講義「ジブリ作品と日本宗教史—ナウシカ・トトロ・千・アシタカ」でも多くの立ち見が出て、2回合わせて520名もの受講者がありました。

当日の様子は「人文学部facebook」で随時配信し、オープンキャンパスに参加できなかった方にも当日の賑やかな様子を届けることができました。

猛暑の中、人文学部オープンキャンパスには昨年の1,480名を大きく超える1,800名の方にお越しいただきました。ご来場いただき誠にありがとうございました。

## 人文学部1号館の増築工事が完了しました。

今春から進められてきた人文学部1号館の増築工事が8月末で完了しました。1階は附属博物館(展示物は来秋まで移設予定)、2~3階が人文学部施設となります。特に3階の301講義室は最新の什器類を整備しました。講義のほかに公開講座や講演会もすでに利用しています。



様変わりした人文学部1号館



人文学部1号館新館への通路



1号館301講義室

## 平成26年10月1日に人文学部ホームページをリニューアルしました。

新ホームページの作成基本方針は――

- ①受験生及びその進路選択に関わるユーザーの利便性を追求
- ②人文学部広報テーマカラーの決定・使用(オレンジ)
- ③学生の姿が見えるホームページに
- ④動的コンテンツの導入

の4点です。

なお、スマートフォンにも対応しています。みなさま、ぜひご覧ください。



人文学部ホームページトップ